

全国連合退職校長会

会報



巻頭言

「繋がりを求めて」

副会長（関東甲信越地区） 木内芳則

平成三十年度もまもなく終末を迎えようとしています。五月からの新しい元号を前に、去りゆく平成に一抹の寂しさを感じているのは私だけでしょうか。

全国連合退職校長会も昨年、戸張敦雄会長が任期中に急逝され、前会長の活動理念「温故創新」を受け継いだ入子祐三新会長のもとで、役員結束してこの一年、歩を進めて参りました。私も副会長会に籍を置き、全連退本部の皆様と共に諸行事に関わって参りました。

アンケート「日本の教育」や「全連退の活動」は、全国五十支部の会長さんの意見を集約して、絞り込まれ、総会の議案として理事会で議決された後、総会で承認されて成立し、活動の実践に移されました。その活

動もほぼ計画に沿って進められ年度末を迎えております。

全連退のスタンスとして、機関決定を大事にしております。総会の議決に基づく諸事業は、

本部の部長・委員長さんや部員・委員の皆様方の鋭意のご尽力により推進され、その都度、常

任理事会や副会長会で報告されて進められて来りました。先ほど

触れましたが、「日本の教育」・「全連退の事業」に関するア

ンケートの集約も大切に考えてきました。今後、常任理事会や

副会長会を経て案がさらに煮詰

められるかと思えます。

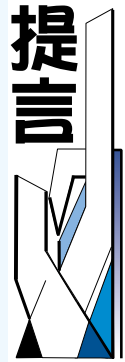
さて、児童生徒数の減少に伴い学校が統合されている今、組

織強化のためにも新入会員の確保は喫緊の課題です。各都道府

県では、新入会員を勧誘する大

事な時期かと思えます。各都道府県の本部及び、支部では現職校長会との懇談会を開催したり、支部会報などをお届けしたり、それぞれに工夫して現職校長会との繋がりを大事にされてきたかと思えます。言わばその集大成がこの時期の取組になります。入会お誘いの文書を持参して、個別訪問されたり、あるいは電話でお誘いしたりするかと思います。出来るだけ平素から現職の校長さんと気脈を通じておくことが肝要かと思えます。

一方、現在の会員との繋がりが大切でです。特に、中途退会者を減らすためにも、連帯感を目指した諸活動の位置づけや工夫も必要です。例えば、会員相互の繋がりを重視して文集を発行したり、会報で先輩訪問などの訪問記事を掲載したりするなど、工夫をしている取組も耳にしております。校長職を経験した私たちが、次のステージにおいても、現職時の仲間と縦にも横にも繋がりを、活動していくことの意義は大変大きいかと思えます。



足元を固めよう

副会長 (東海北陸地区)

川台俊平

会員数の減少、特に新規加入者の減少は、組織にとって喫緊の課題です。少子化が進み、学校統廃合による学校数の減少もその要因ではありますが、加入しない理由が、「加入するメリットがない！」という声を聞くことは深刻です。

東海北陸地区の各県でもその対策を講じてきました。①学校を訪問して退職予定校長と話し、会報等を配りながら直接働きかけるのが最も有効との実績報告があり、みんなで取り組む必要があります。②会員間の絆を大切にすることが大切です。三重では、36年前から文集「いきがい」を毎年発行してきました。総会の開催通知の返信用はがき

に「投稿枠」を設けて募集します。近況報告・短歌や俳句など170字程度の枠ですが、そこに退職後の生きがいを紹介されています。文集の中には、支部担当のページもあり、支部活動の報告が掲載され、身近な繋がりがこそ退職後の生きがいだというものが多くの会員の声です。

我々は、「学校・子ども・地域支援」を標榜し、組織としての活動ができないか模索していますが、なかなか進みません。永年、学校現場で身も心も磨り減らしてきた会員の多くは、実態としてそれはなかなか難しいと感じているようです。(理由や事情は字数の関係で省略)

ならば、退職後の会員の絆を更に深め、第二の人生の生きがいとして、この組織が果たす役割を改めて考えていく必要があるように思います。これまで多くの先輩諸氏のお力でここまで進んできましたが、時代の流れを受け止めながら、もう一度足元をしっかりと固めていくことが、大切だと思っています。

「教育の正常化」を

副会長 (東北地区)

佐藤俊彦

「学ぶ」ということを、「生きる」ということと切り離して教えるはいけない。学ぶことも、遊ぶことも、部活も、友人関係も、「今を、よりよく生きる」ということの中で教えるべきだ。現職時代に先輩から言われた言葉の中で、最も印象深く残っている言葉である。

「よりよく生きようとする小中学生」を育てることが義務教育のねらいであるはずだ。

しかし、この「当たり前のこと」が、スムーズにできないほど、学校現場は追い詰められていくように見える。特に「学校の働き方改革」に関連するものを読んでいると、身につまされる思いに駆られるのは、私だけだろうか。

一方で、全国学力・学習状況

調査の結果の数字が一人歩きし、県や市町村ごとのランク付けが新聞紙上を席捲している。勝ち組・負け組などの言葉が格差社会を象徴し、更に「子どもの貧困率」などという数字も目に痛い。無責任な誹謗中傷が飛び交うスマホ上のトラブルも多い。

安易な群集心理に動かされ、渋谷などで暴走する若者が増えている様子などを見ると、『世の中の動きに心がついていない』ということを感じている。私たちは、「心の希薄な人間」を育ててきたのだろうか。

義務教育本来の目的に照らした「教育の正常化」こそ、現在の教育には必要な考え方であると思う。国や社会に対して、私たち退職校長会が率先して教育の在り方を問い直し、ゆとりとした雰囲気の中で、じっくりと人づくりができる環境を求めていきたいものだ。

古聖賢曰く、「国を興すも人にあり、国を斃すも人にあり」である。



近畿地区

期日 10月26日(金)
会場 奈良ホテル
出席者 113名

秋晴れの爽やかな奈良市において「近畿地区協議会奈良大会」が行われた。全連退の村山広報部長、奈良県の吉田教育長をはじめ8人の来賓と近畿各府県から39人の役員を迎え、県内からは各支部の会長、理事66名が出席し、盛会裏に開催することが出来た。

【協議内容】

「会員増強を図る組織の在り方について」をテーマとして研究協議を行った。

価値観の多様化や再任用の増加、年金支給時期の問題などによる入会率の減少傾向がみられる。今まさに「会員増強を図る

組織の在り方」を考え、手立てを講じることは退職校園長会の持続、発展にとつて最重要課題である。近畿6府県より取組みの状況を報告し合い協議した。会員増強を図るためには役員に若手や女性を登用した活力ある組織体制で、多くの会員が参加してみたいと思うような魅力ある事業を推進していくことが必要である。

また、研修会や懇親会を現職と共同で開催するなどして現職との人間関係をより密にすることも大切であるなどの意見が多く寄せられていた。

続いて次年度の研究協議題を「世代をつなぐ組織の円滑な運営」と決定し、次年度開催県である和歌山県に引き継がれた。

【懇親会・情報交換】

懇親会において「近畿は一つ」の合言葉のもと活発な情報交換が行われ、新会員の勧誘や事業の運営における役員の苦労話などが出され、大いに親睦を深めることが出来た。

東海北陸地区

期日 11月1日(木)
2日(金)
会場 ホテルグランテラス富山
出席者 30名

第一日【協議会】

退職校長会の組織強化と活性化の取組について

○組織の強化・活性化を目指し、入会者の勧誘や入会の促進について取り組んでいること（入会者に好評な活動とその内容など、成果と問題点等）
●ほとんどの県は会員が減少傾向にあり、会員の確保が大きな課題である。

●会報を現職校長に配布しPRしたり、学校訪問し直接声かけを行ったりして、入会促進の工夫をしている。

●教育委員会や現職校長会長との教育懇談会を開催し、小・中・高等学校の課題や要望を県教委へ伝え、学校環境が改善されるよう努めている。

●退職後は様々な団体や組織から勧誘があるが、その中でも退職校長会への入会を誘うに

は、本会の存在意義と活動内容を直し、周知を図ることが大事である。

【情報交換】

○学校支援や地域支援の現状と課題（学校支援のニーズの把握方法、教育委員会・現職校長会との懇談内容の活用など）

●支部ごとに協議や懇談会を行い、情報交換に努めている。
●交通安全指導や清掃・公園整備等、学校や地域のボランティア活動を行っている。

●教育支援活動も行っているが、現場からの要請が少ない地域もあるので、学校現場に活用してもらえよう働きかけを行っている。

【協議会終了後、懇親会】

第二日【教育視察】

●事前研修会（講師：竹島慎二氏）富山市都市計画の中で、富岩運河の果たした役割についての講話

●富山県環水公園からの富岩運河水上ラインFUGAN号に乗船し、中島閘門での注排水（上下2mの水エレベーター）を体験した。

中国地区

期日 10月18日(木)
19日(金)

会場 広島ガーデンパレス
出席者 75名

大会主題

「地域や学校とつながる」

退職校長会

第一日

【研究協議Ⅰ 実践・提案発表】

1 岡山県 『教職員の不祥事根絶とメンタルヘルス対策の充実を願って』

2 鳥取県 『生涯学習 大山カレッジの取り組みについて』

3 島根県 『支部訪問の概要及び地域連携に係る益田支部の活動』
古本よみの市』

4 山口県 『ふるさと散歩』でつながる話・和・輪』

アンケートや調査結果を踏まえての現役の校長、教職員への温かいメッセージ、社会で経験を積んだ人々が仲間と学習する

教室、各家庭から持ち込まれた図書を活用、さらには地域に目を向け島の宝を大切に取る取組などが報告された。その土地、風土に合った創意工夫のある活動は、まさに大会主題である「地域や学校とつながる」実践の報告であった。

第二日

【研究協議Ⅱ グループ協議】

約10人でグループを編成し、各協議題2グループで協議。

《協議題A》

魅力ある退職校長会を目指して

《協議題B》

退職校長会組織の充実

《協議題C》

チーム学校づくりの支援

各グループとも和やかな雰囲気の中で活発な意見交換、参加型のグループ協議が行われ、参加者のつながりがますます深まった。

この度の中国地区退職校長会連絡協議会広島大会のキーワードは「つながり」であったように思う。



青森県退職校長会の活動

青森県退職校長会

会長 奈良 年永

青森県退職校長会は昭和48年に設立し、今年で46年目を迎えた。現在、公立小中学校長であった1150名の正会員と現職小中学校長の準会員で構成し、組織として東青・中弘南黒・西北・上北・下北・三八の6支部を置いている。

今年度も「組織の充実と活動の活性化を図る」「教育関係機関・諸団体との連携を深める」「学校教育並びに地域社会の活動に寄与する」「『あおもり教育の日』の推進に努める」の基

本方針のもと、具体的には支部事業として施設見学・実習・講演会等の研修活動、親睦を深めるサークル・レクリエーション活動、公園清掃等の地域奉仕活動(青森市合浦公園・八戸市種

差海岸)、支部会報や交流誌の発行等の諸活動を展開している。「あおもり教育の日」の推進については、平成14年に退職校長会を含む民間41団体による「あおもり教育の日」推進協議会を設立し、第一次、第二次推進計画のもと6地域持ち回りの推進大会を開催してきている。現在は、第三次推進計画により、昨年度は第15回大会を三八地域実行委員会が主管して八戸市で、今年度は第16回大会を中弘南黒地域実行委員会の主管で、平市を会場に200名を超える参加者を得て開催され、中学生2名の「いじめ防止」に関する意見発表・地域で活動している3団体の実践発表・講演等の内容で参加者の高い評価を得ている。

また、支部会員と本部役員との交流を兼ねた支部持ち回りの理事会・役員研修会を実施しているが、今年度は下北支部主管でむつ市を会場に開催した。本会では新会員の入会率の向上が課題で、現職校長会との交流を相互の活動を通してさらに深めていく必要がある。

地区退職校長会とともに

栃木県連合退職校長会

会長 新沼 隆三

栃木県連合退職校長会は、10地区の退職校長会の連合体である。永い年月を経て培われてきた地区の教育風土や文化・歴史等を大切にしながら、相互扶助と自主・自律の下で切磋琢磨し合うという先人の英知が組織には息づいている。

地区退職校長会の活動は、生涯学習や慶弔、福利厚生、学校支援等、会員に直に結びつく事業が中心である。慶弔事業を例にとると、慶・弔事それぞれに県同様の取組をするところもあれば、慶事は県に委ね、地区は弔事のみとするところもある。生涯学習や学校支援等では、定番の講演・発表会に加え、現職校長との懇談会や外部講師を招いての現職校長との合同研修会、さらには学校支援に係る地区別の交流会、地区内の社会教育施

設との協働など、会員組織や予算規模、地区の実態に応じた活動が現職校長、学校等との信頼関係を繋ぐ。

県の主な活動は、総会や慶弔事業、生涯学習研究協議会、研修・懇親旅行、会報の発行等である。総勢100余名からなる総会は、研究協議会での講演会や発表会は、学び続けることの意義を再確認する場となる。そして、その後の大懇親会は、学びのプロ集団の集いと化する。また、1泊2日の研修・懇親旅行は、造詣の深い会員の車中ガイドと会員の活動報告等により、冠の「研修」の意味が昇華する。

本会の基本方針の具現化とさらなる活性化に向けては、地区会長を構成員とする常任理事会や副会長を構成員とする理事会での率直な意見・情報の交換等により共通理解を深めている。なお、本会を含む52団体で構成する「とちぎ教育の日」では、毎年度、県に教育尊重の気運の醸成等を要望している。

活動の幅を広げる

石川県退職校長会

会長 高澤 忠雄

本県退職校長会は小・中・高・特別支援学校の退職校長の約1650名で組織している。

郡市単位に11の支部があり、会員相互の親睦と研修及び本県教育の振興に寄与することを目的に様々な活動を展開している。

一 学校支援事業

以前は希望者リストを作成し、県教委に紹介していたが、学校現場からの多様な要請に迅速に対応できるシステムに変更した。そのために、各支部の役員等がコーディネーターとなって、現職の校長全員に支援内容のチラシを配布し、気軽に相談、要請できるように周知している。学校運営協議会の委員、地域学校協働活動推進員や講師、部活動指導員、サマースクールの講師などに幅広く活動している。

二 現職校長とのつながり

夏休み中に退職校長会会長、教育振興会会長と小・中・高の現職校長会会長、それぞれの事務局長とで連絡協議会と懇親会を開催している。

また、11月には理事会の後に各校種の代表と教育懇談会を開催し、小・中・高の現状と課題について協議している。例年開催している現職校長との会合で、常に退職校長会は現場の応援団というメッセージを送り続けている。

三 新たな活動へ

今年度から県の要請を受け、「グッドマナーキャンペーン」に参加、協力している。金沢支部では2学期当初に有志が学校へ出向き、保護者や子供たちと共に挨拶運動を実施した。また、11月1日の「石川教育の日」に、希望者を募って、特色ある学校の参観や施設見学を始めた。今後も、生きがいとなる諸活動を広げ、活性化を図りたい。

所属感・存在感の具現化

静岡県退職校長親和会

会長 大塚 哲雄

静岡県退職校長親和会（以下親和会という）は20支部・会員数が3100人余で構成されていて、昨年度創立50周年を迎えた。

親和会も他県支部同様、会員の減少などで繰越金も年々減少してきている。そこで理事会・事務局長会・総会に諮り、会費、旅費、通信費を見直し41万円余を節減した。

この取り組みで会員の退会者が増えるのでは「角を矯め牛を殺す」事になるので、後述の親和会三大事業を更に充実し会員の「所属感・存在感の具現化」を図ることにした。

三大事業とは

①「親和会フェスティバル」

毎年何れかの2地区が担当する。

会員発表、作品展等各支部で工夫を凝らして会員が参加することになり喜びと連帯感を実感する意義あるイベントになっている。

②「親和会たより」 毎年、全会員が200字以内で、所信や近況等を投稿する。毎号350ページ余りの大部である。知人の近況を知る上で大いに役立つと好評で、届くのを心待ちにする会員も多い。本年度で49号になった。

③「親和会会報」 年3回発行する。(1)総会、事務局長会、フェスティバルの報告。(2)各号毎のテーマによる特集。(3)支部だより、会員の寄稿による会員広場——で構成されている。読むのを楽しみにしているという声を耳にし、嬉しい限りである。

51年目に入った本年度、前記三大事業への会員の意識を調査し、新たな展望の下に改革に取り組み、安定した運営への一歩を踏み出そうと考えている。

組織強化・活性化への取組み

大阪・教育なにわ会

会長 竹若 洋三

本会は、会員の長年にわたる教育経験と研究を活かして大阪府教育の振興に寄与するとともに相互の親睦や福利の増進を図ることを目的とし、毎年 ①総会・親睦会の開催 ②教育研究ならびに教育情報の交換 ③地区活動の推進 ④会誌・会報の発行 に取り組んでいます。

当会においても会員数・会費の減少が年々進行し、財政の健全化とともに組織強化・活性化が重要かつ緊急の課題となっています。そのためには、

○財政の立て直し

これまで毎年発行していた会誌が財政を圧迫しているのので平成30年度から休刊とし5年後の発行に向け積み立てている。

○現場との繋がり

・現職校長全員にも会報を送付し、教育なにわ会を知ってもら

うとともに、退職後の加入を呼びかけている。

・研修会では、現職校長から「現場の現状と課題」について話を聞き、交流を図っている。

○魅力ある地区活動の展開

8つあるそれぞれの地区で会員の興味関心に基づく活動を展開している。例えば、「天満天神繁昌亭」で落語・漫才・曲芸の鑑賞、水の都大阪をチャーター船で巡る体験、堺伝統工芸技術の実習会などの研修会や、会員卓話を聞く会、懇親会などいずれの取組みにおいても有意義で楽しかった、又参加したいという声が寄せられている。

○会員の充実した生活を願って

年2回発行の「会報」では、新会員の声の欄を設けたり、会員の寄稿のページを多く確保して、退職後の様々な生き方を紹介したりすることで、会員の豊かな生き方の一助となることを願っている。

以上、地道ではあるが、できることを着実に進めていきたい。

学校支援・社会貢献を目指して

鳥取県退職校長会

事務局長 木村 正人

鳥取県退職校長会は教育の動向を的確に捉え、全連退、県教育委員会、教育関係機関等との連携を密にしながら鳥取県教育の振興に寄与することを期して事業を進めている。

その中で、長年取り組んできた活動の一つに、退職校長会が主催する「鳥取県教育懇談会」がある。県教育行政の施策や取組、学校現場の現状や課題等、多くを学ぶ場ではあったが、平成29年度から学びから行動への転換を図り、『学校支援・社会貢献』に軸足を置いた懇談会を実施している。それは、退職校長会の活動の重点目標の中に活動の活性化及び学校支援・社会貢献への参加が掲げられたからである。本年度も1月25日(金)に、山本仁志県教育長以下、教育次長、県教育センター参事官、

県教育委員会各課長並びに小

中・特・高の校長会から代表2名の出席を得て開催したところである。特に本年度は、学校支援や社会貢献等の活動をどの様に取り組んでいけばよいかというイメージを共有するために、現在、取組を進めている会員3名の実践発表を取り入れてみた。地域の活性化に繋がる取組、教師の人材育成に寄与する取組、地域の児童・生徒の学力や生活を保障していく取組の各発表が報告された。その後、3グループに分かれて発表にもとづいた熟議を行い、最後は3グループの意見や認識を共有することで話し合いを取りまとめた。

結論は、支部・県単位という大枠で事を進めるのではなく、まずは有志が繋がり合い、学校と地域が一体化していくためのつなぎ役として活動を進めると、県教委とは常に情報交換できる窓口を設けておく等がまとめられた。一步ではあるが、確かな前進を実感する会となった。

「ふるさと散歩in上関」

山口県退職校長会

会長 田中 淳夫

本会では会員の親睦と交流を目的とした「ふるさと散歩」を県下20支部持ち回りで開催しています。

今年22回目、瀬戸内海の歴史と海峡の町上関が会場でした。

企画から当日の運営まで、熊手支部の皆さんが当たられました。

開催日の10月5日は大型の台風が接近中という予報が出ていましたが、世話人の祈りと県下各地から集まった100名の参加者の情熱とで予定通り実施されました。

「おお、元氣そうじゃ。いいことだね。」久しぶりの再会に手を取り合う会員。

「今年もまた会えましたね。」

笑顔で挨拶するなじみの会員。

早速、3班に分かれて、海峡の街の散策が始まりました。

第二騎兵隊の参謀小方謙九郎の碑、吉田松陰の詩碑、江戸時代末期毛利藩が築造した砲台跡等、ガイドに遅れまいと狭い路地を上ったり下ったり。痛い膝をさすり、背骨を伸ばして

「知らなかったことばかり、来てよかった。」

「西方寺の曼陀羅絵図、あれはよいものを見せてもらった。」雨の心配もなく2時間の散策を終え、豪華な弁当にこれまた満足、満足。

午後は、「朝鮮通信使の上関来訪」と題して、上関観光協会の職員の話をお聞きしました。

2時過ぎ、すべてが終わると、皆さん名物の「鳩子のてんぷら」を求めて道の駅に一目散。

手にも、目にも、膝と腰にもいっぱいのお土産といっしょに帰途につきました。

「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」(答申)

平成31年1月25日 中央教育審議会
教育課題委員会委員長 橋本 誠司

中央教育審議会は、平成29年6月、文部科学大臣から標記の諮問を受け、初等中等教育分科会に特別部会を設置して議論を進め、同年8月に「緊急提言」、12月に「中間まとめ」、そして31年1月、本答申を取りまとめた。

文部科学省においては、諮問の重要・喫緊性に鑑みて、「中間まとめ」を受けた時点で「緊急対策」を取りまとめ、平成30年2月に「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定並びに学校における業務改善及び勤務時間管理等に係る取組の徹底について(通知)」を発出し、各教育委員会に対して必要な取組の徹底を促してきている。

以下、本答申の骨子と、「緊急対策」として各教育委員会に通知した内容の一部を紹介する。

①学校における働き方改革の目的

教師の長時間労働の要因についての分析を踏まえ、膨大なになってしまった学校及び教師の業務の範囲を明確にし、限られた時間の中で、教師の専門性を生かしつつ、授業改善のため

性を高め、より分かりやすい授業を展開するなど教育活動を充実することにより、より短い勤務時間でこれまで我が国の義務教育があげてきた高い成果を維持・向上することを目的とする。

②学校における働き方改革の実現に向けた方向性

勤務時間管理の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方の促進

学校現場においては、学校現場において、勤務時間管理の徹底を

④学校及び教師が担う業務の明確化・適正化

これまで学校・教師が担ってきた代表的な業務は、授業以外に、おおむね①～⑭のいずれかに分類される。(別表「個別業務の役割分担及び適正化に

「勤務時間管理の徹底及び適正な勤務時間の設定について」

- 厚生労働省のガイドラインを踏まえた教師の勤務時間管理の徹底
 - ICTの活用やタイムカードなどにより勤務時間を客観的に把握・集計するシステムの構築
 - 登下校、部活動、学校の諸会議等の適切な時間設定、休憩時間の確保
 - 通常の勤務時間外に「超勤4項目」以外の業務を命ずる場合の、勤務時間の割り振り等、適正な措置の徹底
 - 緊急時の連絡方法を確保した上での、留守番電話の設置やメールによる連絡対応等の体制整備
 - 一定期間の学校閉庁日の設定
 - 学校運営協議会の場等の活用による、保護者や地域の理解
- 〔緊急対策〕として各教育委員会に通知したもの

ついで)

これらの業務については、職務監督権者である教育委員会や設置者において、教師が専門性を発揮できるか、児童生徒の安全・生命に関わるかといった観点から、中心となる担い手を学校・教師以外に積極的に移していくとともに、そもそも必要性が低下し慣習的に行われている業務は、業務の優先順位をつける中で思い切って廃止していくことが求められる。

⑤ 学校の組織運営体制の在り方

⑥ 教師の勤務の在り方を踏まえ た勤務時間制度の改革

・ ・ ・ 地方公務員のうち教師については、地方公共団体の条例や規則等に基づき、1年単位の変形労働時間制を適用することができるよう法制度上措置すべきである。

ただし、学校現場に導入するに当たっては、長期休業期間中の業務量を一層縮減する（部活動休業期間の設定や部活動指導

員の活用、部活動が参加する大会等の主催者へ大会の在り方の抜本的な見直しの要請、業務としての研修等の精選や受講しやすい環境の整備など例示）ことが前提となる。

また、全ての教師に画一的に導入するのではなく、育児や介護等の事情のある教師等に対しては、こうした制度を適用しない選択も確保できるように措置することが求められる。

⑦ 学校における働き方改革の実現に向けた環境整備
⑧ 学校における働き方改革の確実な実施のための仕組みの確立とフォローアップ

個別業務の役割分担及び適正化について（「緊急対策」として各教育委員会に通知したもの）

<p>基本的には学校以外が担うべき業務</p> <p>① 登下校に関する対応 学校・関係機関・地域の連携を一層強化する体制</p>	<p>学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務</p> <p>⑤ 調査・統計等への回答等 調査の対象・頻度・時期・内容・様式等の調査、研究事業の精査・精選、民間団体からの依頼に対する対応の精選等</p>	<p>教師の業務だが、負担軽減が可能な業務</p> <p>⑨ 給食時の対応 学級担任と栄養教諭等との連携、ランチルームでの一斉給食、地域人材等の参画等の工夫の実施等</p> <p>⑩ 授業準備 サポートスタッフの積極的参画、ICTを活用した教材・指導案の共有化等</p> <p>⑪ 学習評価や成績処理 補助的業務へのサポートスタッフの参画、ICTの活用等</p> <p>⑫ 学校行事の準備・運営 民間委託、外部人材の参画、行事の精選、授業時数に含めることの検討</p> <p>⑬ 進路指導 外部人材の参画、協力、検定試験等の民間委託、書類の簡素化等</p> <p>⑭ 支援が必要な児童生徒・家庭への対応 スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門的人材の積極的参画、法的相談を受けるスクールロイヤー等の配置等</p>
<p>② 放課後から夜間などにおける見回り、児童生徒が補導された時の対応 学校・警察等関係機関・地域の連携を一層強化する体制の構築</p> <p>③ 学校徴収金の徴収・管理 銀行振込・口座引落、教育委員会事務局や首長部局による徴収・管理の実施等</p>	<p>⑥ 児童生徒の休み時間における対応 地域人材等の参画・協力、輪番による負担軽減等の取組の実施</p> <p>⑦ 校内清掃 回数・範囲等の合理的設定、地域人材等の参画・協力・輪番による指導の負担軽減等の取組の実施</p>	
<p>④ 地域ボランティアとの連絡調整 学校側の窓口としての地域連携担当教職員を校務分掌上位置づけることの促進等</p>	<p>⑧ 部活動 部活動指導員等の積極的参画、部活動数の適正化、地域クラブ等との連携、活動時間や休養日の基準設定、入試における評価の見直し、人事配置等における評価の見直し等</p>	

福利厚生情報

超高齢社会・人口減少社会
における年金制度の展望

生涯福祉部長 岡野 仁司

厚生労働省は1月18日、2019年度の公的年金の支給額について、前年度比0.1%増になると発表した。

公的年金の給付伸び率を抑制するマクロ経済スライドを4年ぶりに発動し、伸び率を本来の0.6%から0.5ポイント抑えた。年金の増額改訂も2015年度以来、4年ぶりとなる。

この改定により、2019年度に年金支給が始まる人の受取額は満額の場合、自営業者らの国民年金が月額6万5008円（前年度比67円増）で、厚生年金は会社員だった夫と専業主婦のモデルケースで月額22万1504円（前年度比227円増）となる。

既に受給が始まっている人も対象となる。2019年4月・5月分を支給する6月から適用される。

受給額は増えるが、物価水準ほどは伸びがないため、実質的には目減りする。

年金額は、賃金や物価の変動率に応じて毎年度増減する。マクロ経済スライドは、賃金と物価がともに上昇した場合に、年金の増額幅を抑制する仕組みだ。本来の伸び率から一定の「調整率」を差し引くのである。

年金の受給者が増える一方で、支え手となる現役世代が減少するため、将来世代の年金を確保するために2004年の年金改革で導入されたもので、マクロ経済スライドの発動は2例目となった。

マクロ経済スライド調整とは、将来の現役世代の負担が過重なものとならないように、物価や賃金の改定率を調整して、緩や

かに年金の給付水準を調整する仕組みである。

具体的には、賃金や物価による改定率から、現役者の被保険者の減少と平均余命の伸びに依りて算出した「スライド調整率」を差し引くことによって、年金の給付水準を調整するものである。

例えば、物価変動と賃金変動がそれぞれプラス1.0%で、マクロ経済スライド調整率がマイナス0.5%であった場合、1.0%から0.5%増額に圧縮される。

なお、このマクロ経済スライドは、賃金や物価がある程度上昇する場合にはそのまま適用するが、物価や賃金の伸びが小さく、適用すると年金額が下がってしまう場合には、調整は年金額の伸びがゼロになるまでとど

める（結果として、年金額は変わらない）。物価や賃金の伸びがゼロやマイナスの場合は調整を行わず、物価や賃金の下落部分

のみで年金額を下げることになっていたものだ。

例えば、平成31年度マクロ経済スライド調整率が仮りにマイナス0.5%になった場合、平成30年度未調整分マイナス0.3%が持ち越されるので、物価や賃金の変動率がいずれもプラス0.8%を超えないと平成31年度の年金額は増額改訂されないのである。

なお、平成31年度の物価と賃金がそれぞれプラス1.0%となった場合、プラス1.0%からマイナス0.8%が調整されるので、年金額は調整後の0.2%の増額改訂となる。

また、平成30年度と同様に物価がプラス0.5%、賃金がマイナス0.4%となった場合には、年金額が改訂されないもので、平成30年度分のマイナス0.3%と平成31年度のマイナス0.5%を合わせたマイナス0.8%が次年度に持ち越されるといことになる。

柴山昌彦文部科学大臣
表敬訪問

平成30年12月20日(木)午後4時過ぎ文科省大臣室において、全連退入子会長以下、田中総務部長、村山広報部長、三上会計部長、徳永事務局長が柴山文部科学大臣を表敬訪問いたしました。



まず会長より大臣就任の祝辞並びに面会の機会をいただいたお礼を述べ、持参した全連

退50周年記念誌、「全連退の概要」を基に事業・活動状況を説明いたしました。引き続き、12月13日に文教関係議員に対して行った要望事項を会長より大臣に手渡し、その内容について田中総務部長が簡潔に説明いたしました。国民の祝日としての「教育の日」制定に関して、現在36都道府県18市区町村の自治体が各

地で特色ある活動を展開していることを説明し、さらに文科省の平成31年度予算獲得に向けて一層の尽力を要望いたしました。

大臣は真剣な表情で熱心に耳を傾け、時折頷きながら聞いておられました。要望書の内容については現在鋭意取り組み中であり、今後とも意見交換を通してその成果を政策に生かしていきたい。「教育の日」制定に関しては全連退のこれまでの活動に理解を示すが、祝日の制定に関しては各方面からの要望も多く、現状は月曜日の休日が非常に多いなどの課題もあり、今後の検討課題としたいと述べられました。



短時間ではあったが終始和やかな空気にも包まれ、全員による記念写真撮影を行い大臣への表敬訪問を終えました。

国会議員への陳情

平成30年度臨時国会閉会後、12月13日に「教育振興」「教育の日の祝日」に関する要望書を持つて議員会館を訪問し、文部科学大臣・副大臣・政務官、衆議院文部科学委員・参議院文教科学委員及び歴代の文教関係議員の方々(34名)に陳情を行いました。

今年度は、2030年以降の社会を展望した国の教育施策の重点事項を踏まえ、教育を「未来の投資」として重視し、社会総がかりで子供の教育を支えていくための条件整備を強く要望しました。

新学習指導要領を円滑に実施し学校教育の改善・充実を図るため、計画的な教員定数の改善により、子供一人一人に目の行き届く指導体制を充実すること強く陳情しました。特に、小学校の英語科指導、実験・実習・実技の多い教科に

ついでに専科教員、中学校における生活指導体制の強化、特別支援教育、発達障害の指導、貧困等による学力課題の解消、いじめ・不登校の未然防止・早期発見の強化のための教員数の確保を早急に実現するよう要望しました。

また、新しい時代の教育に向けた学校の指導体制の充実や運営体制の構築のための学校における働き方改革の推進を要請し、そのための教員の長時間勤務の解消や学校における業務改善、教員の事務作業等をサポートするスタッフや部活動指導員の配置の推進を要望しました。

「教育の日」の祝日化についての陳情については、全連退として平成10年以降、広く国民の間に「教育尊重の気運を高め、国民がこぞって教育の振興を期する日」として各自自治体に働きかけ現在、全国36都道府県、18市区町村で制定されていることを報告し、国としての「教育の日」の祝日化を要請しました。

地方の会報紙より



「北海道退職校長会

だより」第229号

空気を読まない生き方

遠軽支部 原 寿男

道新夕刊文化欄8月13日〜15日に演出家鴻上尚史さんと作家村田沙耶香さんの対談「空気を読まない生き方」が載っていました。

「(鴻上)僕は35年ぐらいつつと若いやつらと芝居をやっているんだけど、最近になるほど『そんなことでもないいいんですか』というセリフをよく聞きます。梓組み自体を疑うことをしない。それは、子ども時代に親から『ちゃんとしなさい』と言われ続け、学校では校則が『ちゃんとする』を求めているからだと思います。その圧力が増していると感じます。…」

同調圧力の強さと自尊意識の低さという二つの特徴があると思います。西洋にも同調圧力はあ

「行く川の流れば絶えずして元の水にあらず。淀みに浮かぶ泡沫は、かつ消え、かつ結びて」

7年と7ヶ月

山田地区会 会長 山崎 喜六

大地震、大火事、瓦礫の山と今でも脳裏から消えない。

「行く川の流れば絶えずして元の水にあらず。淀みに浮かぶ泡沫は、かつ消え、かつ結びて」

岩手県公立学校

「退職校長会だより」第175号



わが山田地区会でも、様々な動きが見られましたが、収まる

間違いなく、復興は進んでいます。海水浴場が2カ所整備され、万里の長城のような堤防も完成しウォーキングに最適の場と化しました。

福岡県退職小学校校長会

「会報」第117号

俳句で余生を楽しむ

大川市支会 中村 イソ子

先輩の先生からの誘いで退職後に始めた俳句も、早十二年。五十数年前に他界した父も俳句を嗜んでいたこともあり、余り

抵抗なく「大川ホトトギス会」に入会した。

最初の吟行地は、初夏の筑後川。鱗漁解禁後の大河を、どのように作句して良いか途方に暮れ、苦心した末の一句が、次の句であった。

『どの船も鱗舟に見ゆ筑後川』
しかし、吟行句会の参加を重ねて先輩の作品を読ませてもらう度に、自然界の営みや四季の移ろいに次第に関心を抱くようになった。外出時は句帳と歳時記を携え、発見や感動をメモし、家事の間の暇を見つけては一句にまとめることが、私の楽しみとなっていた。

ここ数年、姉の介護に福岡へ通う日も増え、遠方での句会には参加が叶わなくなってきたが、週一回程度は近隣の句会に出来るだけ参加するように努めている。また、柳川の雛流し・船芝居・白秋祭・月見舟・大川の風浪宮大祭・大牟田の大蛇山祭は欠かさず参加。その外に四季折々の阿蘇や北山ダム、七山の檜

原湿原吟行等、その情景がありありと浮かぶ程通った。

このように吟行や句会へ参加することが、私のストレス発散、心身の健康維持、認知症予防の一翼を担っていると自負している。後期高齢者を目前に、これからも余生を俳句で楽しみつつ暮らせたなら最高である。

近詠自作句より

花火果て吾も雑踏の街へ消ゆ
篠苗の風に乗ってくる水の秋
千枚田千の額縁彼岸花
能管の秋を深めて透き通る
晩秋の空へ百の熱気球



広島県退職校長会

「会報」第133号

人との出会いが元気の源

甲奴支部 宮田 泰行

約十余年前、退職を待っていたかのように地元の農業法人代表(有会社)にとの強い要請を受けて、私の第二の人生が始まった。

当時一番若かった私は、早速

後継者として播種から育苗、田植え、水管理、稲刈り、唐臼や袋詰め等、生産から出荷までの作業や大型農業機械操作、JAや市や県等との渉外・・・大きな挑戦の日々となった。

高齢化や少子化、後継者不足等の問題が年々深刻化し、田舎に押し寄せる過疎化の現実は、地域や人の心まで衰退させていくようである。

我が農業法人も高齢化の一途で後継者不足となった。しかし、農作業を通して郷土を維持し、地域に元気の輪を広げたいと思った。

そこで、法人以外の地域の人や高校生、他の地域の人への協力をお願いした。有難いことに皆さん快く作業に来てくれ、そのことが人の輪、地域の活性化にもつながってきた。米づくりは、太陽・気温・水等自然の変化や、チソッ・リン酸・カリの肥料三要素の配分等、科学的な取り組みであり「命を育てる」取り組みでもある。毎年、昨年

の反省にたち、年間計画を作り、みんなを取り組むから、意欲がわいてくる。私たち上下町の4事業法人は府中市の給食センターと給食米の契約をして数年、将来を担う子供たちが美味しく食べてくれるコシヒカリ米を追求していきたいと思っている。

私は、退職後描いていた生活とは程遠い多忙な日々を過ごすこととなった。しかし、農作業で一定の規則的な生活で汗し、農業にたくましく取り組む方々との出会いは、教職時代とは違った新しい世界として大きな刺激になり元気の源になっている。

茨城県退職校長会

「会報」第110号

ささやかな「夢」を追求めて

那珂支部 水柿 修一

私が小学校の頃には、多くの小学校で学芸会という行事が行われていた。4年生の時に当時の担任が、何とシェークスピアの「ペニスの商人」の芝居を上

演すると言い出したのだ。主役のユダヤ人シャイロツクの役がなかなか決まらず、今まで主役級などには縁遠かった私に、巡り巡ってその大役が回ってきってしまった。役の決定が遅かったこともあり、練習不足を補うために、担任の宿直の日に学校に呼ばれ、宿直室での個別指導が夜遅くまで行われて当日を迎えた。本番のその劇中で、主人公のシャイロツクが相手役の胸の肉1ポンドをナイフで切り取るという場面があり、私がナイフを振りかざしたその瞬間、舞台の最前列に居たおばあさんが声を上げて泣き出してしまった。相手役の同級生の祖母だったらしく、びっくりしておもわず泣き出してしまったらしいのだ。今でもその時のことは強く印象に残っている。

そんなこともあってか、5年生になった次の年も「レ・ミゼラブル」のジャンバルジャンの役をやることになってしまった。残念ながら6年生になって学芸会がなくなってしまうのだが、この時のことが私の芝居へのささやかな目覚めになったのかもしれないと思う。

大学時代には演劇部に在籍し、本公演ばかりでなく、僻地の小中学校への移動公演など、主に役者として貴重な経験をさせてもらい、それが後の私の教師人生の中にも大きく生かされている。教師になってからも、演劇部の大先輩であり、後に民話の語り部として「歩座」で活躍した故亀山歩氏に声をかけられ、「水藻の会」というアマチュア劇団を結成して、数年間は県民文化センターを中心に活動した。

現在も、演劇熱が冷めきらず、故蜷川幸雄氏が提唱した、埼玉を拠点にした60歳以上の高齢者演劇集団「ゴールド・アーツ・クラブ」に所属して、今年度で3年目になる。今年度は、埼玉で10月に本公演予定の「病は気から」(モリエール作)という芝居に向けて、8月から稽古に入っているところである。

これからも、体力と気力の続く限り、ささやかな夢を追い続けていきたいと思っている。



「群馬県退職校長会たより」

第76号

おもしろ学習塾

利根沼田支部 伊藤 知幸

退職して八年目を迎えた。退職後、市の嘱託を三年、その後地区の仕事を三年勤めた。無趣味が趣味と言ってきた私だが、今はあれやこれやと忙しい毎日を送っている。

一昨年、地区の区長として諸課題に取り組む中、少子高齢化

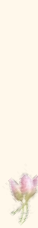
同様に難渋した。どこの地域でも同様であろう。

そこで、自分に何ができると考えた時に浮かんできたのが高齢者の「要場所」(必要とされる必要がある)づくりであった。と同時に、子どもたちに学校での学習を補完する学びのおもしろさを体感させてあげられないかと考えた。おもしろさを実感できる学習会である。

そして、昨年七月、交流を図りながら楽しく学べる場を設けて有識者から学習することの醍醐味、学ぶことの楽しさを教えて頂こうと「上原おもしろ学習塾」を立ち上げた。その後、賛同して頂いた推進員さんと会議を重ね、ようやく本年五月、「沼田市市民協働によるまちづくり事業」の認定を受け、『おもしろ学習塾』の開催に漕ぎつけた。

この学習塾は、毎月一回(年十回)、第四水曜日または土曜日、午後一時三十分から上原町区民館を会場にして二講座、講

師は延べ二十名（因みに退職校長协会会员が六名、元教諭が五名、一般が九名）、参加費は百円（お茶を配付）、どなたでも参加可能とした。そして、毎月二回、回覧板で地元住民に参加を呼びかけるとともに市の広報や地元の報道機関でも呼びかけて頂いた。



果たして何人が集まってくれるか不安の中、第一回は言い出しっぺということで私が講師を務めた。講座内容は「おもしろい日本語」と題し、仮名や音韻の話を見せて頂いた。後半の講座は「江戸時代の稲作」と題して地区にお住まいの退職校長にお世話になった。参加者は想定外の四十八名（中学生三名）も集まった。

宮崎県退職校長会

会報「芳馨」第89号

小さな喜び

日南支部 押川 正信

現在、第六回（十月）まで参加者は延べ二百三十名を超えた。参加者の大半は七十代の地区住民だが、大変好評を頂いている。そして、「来年度も開催してほしい」との声も頂いている。また、講師からは「改めて勉強する機会になった」との感想も寄

せられている。この学習塾の様子は、「おもしろ学習塾で交流」の見出しで東京新聞群馬版（九月三日付）をはじめ、地元の報道各社からも紹介されている。私も学習意欲の旺盛な方々と一緒に「要場所」をつくり、学習できる喜びを感じている昨今である。

鳥取県退職校長会

会報「積雲」第90号

地域の人と触れあつて暮らす

倉吉 石田 正紀

私の時計のアラームは、午前六時と七時十分。起床の時間と、安全ポランティアとして家を出る時間である。毎朝、横断歩道に立つのが日課であり、冬の日には、横断歩道周辺の雪かきをすることもある。列を乱しがちな児童を注意したり、「今日も元気がんばろうで。」と呼び

かけたりまするなど、教員生活の延長の感がある。大声で挨拶を返す子、恥ずかしそうに通り過ぎる子など様々だが、子どもの声や笑顔から元気をもらうとともに、地域のお役に立てているという実感もあり、日々の活力につながっていると感ずる。

また、毎日行われる地域のグラウンドゴルフ（GG）の練習に、できるだけ参加するようにしている。「その歳でGGですか、早いですね。」と他人に言われるが、少しは身体を動かす方が健康にいいだろうと考えてのことである。GGの同好会に参加したことで、一挙に四十人以上、それも年配の方々と知り合いになり、プレーの合間に世間話をしたり、懇親会でお酒を酌み交わしている。

市生涯学習講座で尺八を手にして七年目を迎えている。「春の海」が吹きたくて始めた尺八である。「春の海」の練習

活において、達成感を積み重ねることが良いとのことである。

た、講師からは「改めて勉強する機会になった」との感想も寄

る機会になった」との感想も寄

る機会になった」との感想も寄

る機会になった」との感想も寄

る機会になった」との感想も寄

る機会になった」との感想も寄

五反田だより (事務局)

「子供は叱られる権利があり、親はまたこれを叱る権利があるのである。善いことも、悪いことも勝手に、少しも叱られることも、正されることもない子供は、決して大切にされている子供ではなくて、むしろ虐待されている子供である。」(「賀川豊彦氏大講演集」から)

今の世の中、親は叱るべき時に子供をきちんと叱っているだろうか。「これは叱られるな、叱られた方がいいな。」と思っている時にバツチリ叱られることは、子供の心の成長にとって極めて重要である。

「厳しさのない優しさは本物ではない」という言葉もある。要は、子供とのかかわり方の問題でもある。家庭の教育機能の大切な働きとして、厳しさと冷たさ、温かさと同様かしの区別をしつつ、「叱る」について考えてみたいものである。(OT)

◇1月

- 15 文部科学省予算案説明会
に出席
- 17 部長会
- 年間紀要原稿提出
- 25 全日中理事会で入会勧誘
運営検討会議
- 28

◇2月

- 4 部長会・年間紀要校正
組織対策検討会議
- 8 第5回常任理事会
- 12 広報部会
- 13 全連退情報165号発行
- 14 全連小理事会で入会勧誘
- 15 部長会・年間紀要校正
- 18 広報部会
- 21 年間紀要最終校正
- 22 生涯福祉部会
- 25 広報部会

◇3月

- 4 部長会・財務検討会議
- 11 教育課題委員会
- 12 第2回副会長会
- 13 部長会
- 19 部長会
- 20 出版事業委員会

全連退ホームページ「表紙の写真」募集について

全連退ホームページの表紙を飾る写真を、会員の皆様から募集いたします。内容は、表紙にふさわしいものであれば、自由です。写真は3~5枚で、メールまたはプリント写真での受付といたします。採用させていただきますと、作品名とお名前を掲載して一定期間活用させていただきます。宛先は全連退広報部です。今回の募集期間は2019年8月31日までです。

送り先 メール info@zenrentai.org
郵送 東京都品川区東五反田5-21-13-308

2019年度の理事会及び総会の日が決まりました。
理事会 6月4日(火)
総会 6月5日(水)
会場 きゅりあん(品川区総合区民会館)

編集後記

○寒さの厳しかった冬もようやく終り、暖かな春の季節が訪れました。会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。
○教育情報として、中教審答申関係の記事を掲載しました。働き方改革に関する方策について述べています。ぜひ一読ください。
○地方の会報紙からの記事も多く転載させていただきました。
○本年度そして平成最後の会報を無事発行できました。今回も皆様方のご協力、原稿が予定通り集まりました。ありがとうございます。

全連退会報 (211号)

発行 平成三十一年三月十五日
発行所 東京都品川区東五反田

五二一三三三〇八

全国連合退職校長会

電話 〇三三四四二八七六八

FAX 〇三三四四二八七六八

Eメール info@zenrentai.org

振替口座 〇〇一九〇九四四七二〇

○責任者 入子 祐三

印刷 株式会社 信行社

電話(〇三)三三三三三六二二